SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「方言の価値が高まった」という言説を再考する

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2018-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 滋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024551

「方言の価値が高まった」という言説を再考する

熊　谷　滋　子

1　はじめに

メディアや地元が全国向けに方言を利用したり、「楽しん」だり、方言で「励ましあったり」(田中2016：iv) するようになったのは、かつては見下されていた方言の「価値」が上昇し、ポジティブなイメージをもつようになり、方言コンプレックスがなくなってきたためだとする言説がある[1]。確かに、全国的に注目される場で方言が使用される機会も増え、方言に興味関心がもたれてきたように思われる。以下に、ごくわずかだが、近年の方言使用の事例を列挙しておきたい。

1）テレビ番組やフィクションなど
　　娯楽番組での方言利用（例、『秘密のケンミンSHOW』(日本テレビ)）
　　方言ドラマ、方言マンガ、方言CM
2）方言に関する一般向け書籍
　　『方言女子』(マガジンハウス)『方言男子コレクション』(レッカ社)
　　など
3）地域おこし、励ましなど
　　方言みやげ、被災地への方言による応援
4）インターネットなど
　　ケータイ、インターネットでの利用、方言スタンプ

[1] 田中ゆかり氏は、大学で、方言を扱う授業の受講生が増えてきたことをあげ、「地方を象徴し低くみられていた方言が、価値あるものとして受け入れられるようになった」とコメントしている(『朝日新聞』2017年9月10日付)。

本稿では、方言の価値が上昇したとするこれまでの研究を批判的に概観しつつ、特に東北方言に注目し、メディアで具体的にどのように表象されているのか、これまでの調査をまとめながら、方言の価値上昇がはたしてなされているのかを考察する。

結論からいえば、日本社会は現在も共通語（標準語）中心であり、方言の使用場面が減った分、めずらしさや新鮮さを帯びて、「商品価値」をもつようになったために利用されるようになったにすぎないと考えている。それは、ラジオやテレビなどのメディアの発達や浸透により、共通語の話せる方言話者がほとんどになり、共通語と方言の「使い分け」ができるようになったために、方言で笑われることが少なくなり、表向きの方言コンプレックスがなくなったにすぎない。実際のところ、今なお、日常生活において方言を使用できる場面は限られたままである。特別な領域以外では、方言を知っていたり、使えるからといって、特に方言話者が社会的に上昇できるわけでもない。方言を使ったために気まずい体験をしている人もいる。

今回の価値言説を通し、あらためて、方言をめぐり「価値」や「ポジティブになった」ということが何を示しているのかを考えてみたい。そもそも一口に「価値」や「ポジティブ」といっても、その意味するものは多様である。これまでの方言研究において、方言をどのような価値からとらえているのか、また、ポジティブになったということが、誰にとって、どの点でポジティブになったのかについて、明確に規定する必要があるという課題もみえてきた。

本稿では、メディアが発信する方言や地元のアピールとしての方言が、方言、方言地域、方言話者に対するより豊かな視点や観点をもたらすものというよりも、むしろ従来の方言イメージを再生産し、結果的に、方言、方言地域、方言話者をめぐるステレオタイプを強化してしまっているのではないかと憂えている。

方言の「価値」上昇という語りについては、すでに安田（1999：20－21）が、「方言学者による「方言」の社会的地位、評価に関する語り方が、かつては抑圧され、現在は尊重されているというかなり単純なものなのである」と、多くの方言学者の楽観的な態度に懐疑的な見方を提示している。本稿は、安田の指摘した1999年以降の方言学者の研究を中心に概観したうえで、これまで私が調査してきた、特に東北方言を利用したメディアの事例から、東北方言、および、東北地域、東北方言話者の描かれ方を通して、現代の日本が依然として共通語中心であり、特に東北方言はきつく他者化され、周縁化されていることを明ら

かにする[2]。

田中（2016：199）の「あとがき」に、本稿のよりどころとする発想を引き出してくれる質問があげられている。ここで引用し、私なりの回答を試みたい。氏は、コロンビア大学東アジア言語文化学部で、「なぜ日本語社会では地域方言がこれほど多様な表現リソースたりえているのか、米国では民族性や社会階層が反映される社会方言の方が優先的な表現リソースになっているように感じる」という質問を受けたという。私は、ここで特に、この「多様な表現リソース」を、マジョリティを支えるために有効な、マイノリティに属する表現リソース（言語資源）と解釈する。もちろん共通語（もしくは標準語）が中心的な表現リソースであるが、ここで念頭にある「多様なもの」とは、むしろそれ以外のものと解釈する。繰り返すが、日本は、今でも東京中心[3]、共通語中心であるため、東京以外の地域のことば、つまり地域方言がマイノリティ側の特徴として位置づけられる。一方、アメリカは、白人や上流階級中心、アメリカ英語中心であるため、民族性や社会階層からみて、アフリカ系アメリカ人、ラテン系／ヒスパニック系アメリカ人、アメリカ先住民、アジア系アメリカ人その他の民族や下層階級に位置づけられている人たちが、その言葉遣いを通して、マイノリティとして特徴づけられる（Lippi-Green 2012）。メディアは、概して当該社会のマジョリティの優越性を維持し、あるいは高める傾向をもつ。マジョリティの優越性を示すためには、常にマイノリティへの言及が必須となる（モリスン1994）。周縁をしっかりと色づけしておかなければ、中央が定まらないからである。日本社会とアメリカ社会では歴史的社会背景が異なり、マジョリティ集団とマイノリティ集団の特徴が異なるため、先の質問がでてくると思われる。マイノリティの言葉遣いが重要な「表現リソース」になる点は共通している。

---

[2] 2011年に発生した東日本大震災に生じた、東京電力の原発事故のせいで、福島県の原発立地地域の人々が避難を余儀なくされた。その後、避難先での深刻ないじめ問題も報告され、その重大さが明らかにされている。「学んで　避難した子の気持ち」（『朝日新聞』2017年２月18日付）という記事は、福島県から避難した子どもたちがいじめの標的になる恐れを抱き、教員や研究者らが震災直後に、小中高校生向けに授業案を作ったが、活用されないままになっていたということを伝えている。そこで紹介されている具体的な授業内容として、「太郎君の悩み」という概要の中に、方言への差別、具体的には、「友達が方言をまねするようになった」という点が含まれている。2017年のこの時期に、新聞報道にあるような、子どもたちの間で、「方言」を対象としていじめが行われてしまうという教員や研究者の危惧をどう受けとめたらいいのだろうか。

[3] 日本国内の最新の状況をみてみると、地方創生と叫ばれながらも、地方にとってはそれほど好ましい状況になっていない。「人口　首都圏集中続く」（『朝日新聞』2017年２月１日付）にあるように、今でも一番人が移り住んでくる所が、首都圏の中でも東京であることに変わりがない。

2 「方言の価値が高まった」とする先行研究

「方言の価値が高まった」とする言説は、(多くの) 方言研究者の間で今やごく当然の認識となっている。最新のものを紹介すると、篠崎 (2017：212) が、「おわりに」で、「かつては“方言コンプレックス”などと言われ、隠す存在であった方言が、今では人々の帰属意識を高めたり、あるいは地域色をアピールする重要なアイテムとして、その価値が見直され、前面に押し出される時代になってきた」とまとめている。明治以降、近代国家を目指し、ことばの上での統一をはかるべく、標準語政策を推進し、標準語が日本国民の身につけるべき「国語」となり、一方で、標準語に選ばれなかった地域のことば、つまり方言は、非標準となり、(かつては誤ったものとしても) 見下されてしまうことになった。第二次世界大戦後においても、イデオロギー色の強い「標準語」という語を、全国に通用する言葉という意味で「共通語」に置き換えてその規範性を薄めはしたものの、「共通語」を基本とする教育や社会システムは健在である。以下で、「方言の価値が高まってきた」とする言説をより詳しく検討していく。

2.1 共通語の普及

方言の「価値」が高まったことへの要因として強く認識されているのは、共通語の普及である。井上 (2004：26) では、日本語の方言の社会的類型の変遷をまとめている。方言への価値評価について、明治～戦前は「マイナス」、戦後は「中立」、平成にかけて「プラス」へと変化してきたとしている。一方の言語の使用能力については、「マイナス」時期は「方言優位」であったものが、戦後の「中立」時期は方言と共通語が「両立」しており、「プラス」時期以降は「共通語優位」とまとめている。つまり、共通語が普及してきたことと方言への価値評価が「プラス」となったことを関連づけている。

小林 (2004：105～106) は、共通語の普及によって方言の「社会的価値」が高まったことを以下のように主張している。

戦後、方言の価値が上昇したのは共通語が普及し、誰もが共通語を話せる時代になったことが背景にある。共通語が当たり前の時代になったからこそ、逆に希少価値としての方言の存在がクローズアップされてきた。比喩的に言えば、現代は、共通語が方言を引き立ててくれる時代である。

このような状況を方言の「アクセサリー化」と称している。小林によれば、方言は今や情報を伝達するよりも、「相手の確認と発話態度の表明」を示す、いわば心情を伝達する手段になっていると述べている。

さらに、田中（2011：43）は、「「共通語」の普及により」、「場面に応じた「方言」と「共通語」の包括的なスタイルとしての使い分け能力をもつようになった」と捉えている。

以上、井上、小林、田中は、共通語が話せるようになるにつれて、伝統的な方言が衰退し、相対的に方言が希少価値をもつようになり、その「価値」が高まってきたと考えている。将来については、井上は「共通語優位」とし、小林は「共通語化」が進行するとみているが、田中は「方言の「価値」が高まるとともに」、積極的に方言を話す人（「積極的方言話者」）が増えていくと予測している点で異なっている。

田中（2011）で指摘している1980年代以降の方言の「価値」の高まりに合わせるかのように、1995年に文化庁国語審議会が「方言の尊重」という答申を出している。が、以下のように、あくまで基本は共通語であることを確認している。以下にその箇所を引用する。

方言は地域の言語生活を生き生きとさせる豊かな言葉ではあるが、全国的なコミュニケーションの基本は共通語である[4]。

2000年には、このような方針のもと、さらに「敬意」という点からとらえている。

地域社会では、共通語と方言を使い分けることを含めて、対人的な配慮の表現が多様な姿で行われている。一般に、同じ地域社会に属さない相手や不特定多数を相手にする業務など公的な場面では共通語を核としつつ、他方、近隣の親しい間柄や地域社会の暮らしの場面では地域の方言を適切に使うという使い分けが、敬意表現の一つとして行われる[5]。

---

[4] 文化庁文化部国語課『国語審議会答申・建議集』1996年290ページ

[5] 国語審議会答申（2000）「現代社会における敬意表現、四．敬意表現についての留意点」www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_bunka/kokugo_index （2017年９月11日閲覧）

ここでは、「使い分ける」ことが敬意を示すものであるという解釈をしている。「使い分け」については、2.2で詳しく扱うが、その意味するところが決して中立的なものではなく、共通語と方言の序列関係を前提とした発想があることを指摘したい。いずれにしろ、国語政策としては、方言尊重とうたいながらも、根底においては共通語中心であることに変わりはない。そもそも明治以降の国語政策が共通語を基本に置いてきたために、当然のことながら、共通語が普及してきたともいえる。

2.2　使い分け意識、能力の高まり

方言の「価値」上昇と密接なかかわりをもって語られるのが、相手や場面に応じて共通語と方言を「使い分け」る、その意識と能力の向上である。2000年の国語審議会の答申にも登場してきたものである。「使い分け」をめぐる調査研究の最新のものが、田中・前田（2012）で論じられている。本稿で注目する「方言の価値上昇」言説で重要な鍵を握っていると思われるので、長くなるが、田中・前田の論文を紹介しながら、そのベースにあるものを考えてみたい。田中・前田は、2010年に全国を対象として方言使用と地域との関係を探るための調査をしている（有効回答1347人）。質問項目には、生育地の方言や共通語に対する好悪、相手や場面によって方言と共通語を使い分けているか、ふだんの生活では共通語を使用しているかなどが含まれている。想定する会話の相手は、「家族」「同郷の友人」「異郷の友人」としている。調査結果から5つのクラスに分類している。以下に、その分類とそれぞれの主な特徴を短く紹介する（田中・前田2012：126－128）。

クラス1：積極的方言話者
　生育地の方言への好意度が高く、共通語に対する好意度が最低である。誰に対しても方言を使用する。使い分け意識は高くない。
クラス2：共通語話者
　共通語への好意度が高めで、誰に対しても共通語を使用する。
クラス3：消極的使い分け派
　生育地の方言への好意度は低いものの、異郷の友人にも方言を使うこともある。使い分け意識が高いわけではない。
クラス4：積極的使い分け派
　生育地の方言、共通語への好意度がもっとも高いが、異郷の友人には方

言は使わない。ふだんも共通語を使っているという意識と使い分け意識が高い。

クラス５：判断逡巡派

多くの問にわからないと回答している。

調査結果のうち、ここでは生育地との関係について論じている部分に絞ってみていく。以下にそれぞれのクラスに対応する地域を、ここでは、表にまとめる（田中・前田2012：137)。

表１　クラスと密接な地域

クラス	地域（□内が典型的な地域）
クラス１　積極的方言話者	近畿・中国・四国
クラス２　共通語話者	首都圏・北海道
クラス３　消極的使い分け派	北関東・甲信越・北陸・東海
クラス４　積極的使い分け派	沖縄・九州・東北・中国
クラス５　判断逡巡派	北海道

田中・前田（2012：139）は、様々な考察をした上で、「「方言」と「共通語」の意識的使い分けや、方略としての「方言」使用という意識が成立するためには、先に述べたような「方言」に対するネガティブなイメージがポジティブなものに移行しているということが前提となるだろう」と結論づけている。つまり、方言がポジティブにイメージされるようになったために、方言と共通語を使い分けようとする意識も高まってきたという認識である。

ここで注目したいのは、特にクラス４の「積極的使い分け派」である。ここにあてはまる地域は、いわゆる日本列島の周縁に位置する地域である。まず疑問に思うのは、「積極的に使い分ける」ことが、方言をポジティブにとらえているためなのだろうかということである。先にあげた2000年の国語審議会の答申では、基本はあくまで共通語であることをおさえたうえで、「使い分け」ることの大切さをうたっている。

田中・前田（2012）の調査結果をより細かくみてみよう。クラス２の「共通語話者」に分類された話者、特に首都圏の話者は、「積極的使い分け派」に属する率が０である。あまり使い分け意識をもっていないことになる。このことは、

どんな時でも共通語で十分であり、相手や場面で使い分ける必要がないと感じていることを示している。この点から、今日の日本においては、国語審議会の答申をみるまでもなく、共通語中心社会であることが裏付けられる。また、クラス１の「積極的方言話者」の典型とされる近畿地域のことば、つまり、関西方言の話者は、誰に対してもどこでも方言を使用すると思っており、クラス４の方言話者とは対照的である。以上のことから推測してみると、クラス４の話者の「意識」は、自分の方言は好きだが、その使用が限られているということを、他のクラスの話者に比べて、より強く感じており、できれば共通語で話した方が無難だと思っているということではないだろうか[6]。

さらに、この調査は、私的場面での使い分けに絞った設問をたてているとしている。周知のように、公的な、正式な場面では共通語が求められており、さらに私的な場面における「使い分け」を意識させられているということは、クラス４の方言話者にとっては、方言を堂々と使用できる相手や場面がさらに制限されていると感じているということではないだろうか。自分の方言が、相手や場面によっては、失礼になる、恥ずかしいものであるという意識が強くあるため、その分その使用を控えるということが、いわゆる「使い分け」意識と称されているのではないだろうか。もし、「方言の価値が高まってきている」とするなら、このような「使い分け」といった配慮（国語審議会による「敬意」）などは特に必要ないのではないだろうか[7]。

田中・前田（2012）では、今後は、クラス４もクラス１へ移行していく、つまり「積極的方言話者」になると予測している。かつて高度経済成長期に、例えば東北から多くの若者が集団就職によって「上京」し、その方言が笑われ、バカにされ、「方言コンプレックス」を抱くようになった。当時は共通語が十分に話せないということから、ここでいう「積極的方言話者」でいるしかなかっただろう。クラス４の話者が再び「積極的方言話者」になれるのか、今後、注意深く見ていきたい。

ここで、特に東北方言をめぐる調査をみてみよう。佐藤（1996：23－41）は、

---

[6] Weatherall（2013：164）は、方言に対して肯定的な態度があるのに、その方言集団を支えるための社会変化をもたらすような実践は否定されるとなると、政府主導の言語政策により肯定的な態度をもつようになりながらも、実際話す人が少ないのは非常に問題があると指摘している。

[7] 自分が話したことが、相手に伝わっていないと感じた場合、それが言葉遣いのせいなのか内容のせいなのかと思いめぐらし、もし、方言のせいだと気づいたら、できるだけ共通語で話すというのは、どの地域の人であっても当然のことのように思われる。現状では、クラス２以外の、どのクラスの人も基本的な「使い分け」をしているはずである。

1987年から1989年にかけて、「津軽弁」地域における共通語と方言の使い分け意識を調査している。そこには、津軽弁を使って笑われた経験の有無と使い分け意識の関係を示す貴重なデータがある。使い分けに対して積極的に肯定する割合が、笑われたことのある人は43%、笑われたことのない人は35%である。また、その調査において、笑われたことがあってもなくても、使い分けについては、6割以上の人が肯定的であったという。それは、地元であっても共通語を話す見知らぬ人には83%が「共通語で話すようにつとめる」もしくは「津軽弁独特の言葉がでないように気をつける」というものである。さらに、「東京で見知らぬ人に道を尋ねる」時には、96%が共通語で話すという結果もある。東北方言話者にとって、共通語を話す人に対しては、地元であれ東京であれ、共通語で話さなくてはならないと意識していることが確認できる。さらに、津軽弁を「嫌い」な人の56%、「嫌な感じがする」と答えた人の84%が、「子供や孫にはことばを「使い分けられるようになって欲しい」」と答えている。方言に対して肯定的になれない経験や思いがある場合はなおさらのこと、できるだけ相手に配慮して、日本語社会で規範とされる共通語を使いこなせなければ、日常生活がスムースにいかないと痛感しているのである。それが、今風にいえば「敬意」の一側面とされてしまうのである。

さらに関連するものとして、『オレオレ詐欺!?』(2007年NHK教育テレビで放送)について考えてみたい。福島県立南会津高校の放送委員会が制作したビデオである。自称詞「オレ」は共通語では男性専用であるが、東北方言では男女ともに使える表現である。この点に注目し、女子高校生が「オレ」を使うことの是非について時に真面目に、そして時にユーモアを交えて展開している。その最後に、「「オレ」をご使用の際は自分と相手とのバランスを考え無理なくご使用ください。また、将来のことを考え、「私」も使いこなせるようになりましょう」とかしこくまとめている。つまり、彼女らにとって、「オレ」の方が本音を語れるが(このことがタイトルに込められている)、世間で期待された丁寧さや「女らしさ」という点から、将来社会に出ていった場合、それを使うと否定的なイメージを伴うため、共通語の「私」を「使いこなせる」ようにした方がいいという結論に至ったのである。女性の東北方言話者、特に若い人の場合は、共通語と「女らしさ」という点から、方言使用において、このような負荷がかけられてしまっている。

『オレオレ詐欺!?』でもみられたような「女らしさ」の縛りと使い分け意識との関係からみてみると、日本語社会において、一般的に女性の側に、相手や

場面によって丁寧な表現をすることが強く期待されている。「そんな乱暴な言い方をしてはいけません」としつけられるのは女の子の方に多い。この点が、相手や場面に応じた、方言と共通語の「使い分け」と共通しているように思われる。クラス１やクラス２の話者よりも、クラス４の方言話者の側に、より「使い分け」の負荷がかかっている。相手や場面に応じた使い分けを要請されている。クラス４の地域方言が公的、あらたまった場面ではよりそぐわないのである。以前に、「使い分け」というのは中立的な表現ではなく、共通語と方言の序列関係（さらには方言間の序列関係）を前提とした発想があると指摘したが、以上のことが理由である。

２．３　方言コンプレックスがなくなった

この章の冒頭部分で引用した篠崎（2017）でも語られていたが、田中（2011, 2016）は、新聞記事や投書を調査した結果、1980年代以降、方言コンプレックスについてのものがなくなってきたため、「「方言」をネガティブなものとして捉える考え方がほぼ消滅した」（田中2011：52）としている。方言の「価値」が上昇したために、新聞記事や投書において、方言にまつわる悩みや問題が登場しなくなったと推測している。が、はたしてそうだろうか。

私が行った大学生を対象とした簡単なアンケートからみても、方言についてそれほど肯定的に思っているわけではないことがみえてくる[8]。その中には、県外や首都圏などでは極力方言を使わないように「使い分け」ていたり、また、県外や首都圏の大学に進学した友人などが方言のことでからかわれたり、その方言であだ名をつけられたりしたという指摘もあった。2016年においても、20歳前後の若い世代が方言についてこのような思いを抱いている。ちまたでは方言がもてはやされているような印象があるかもしれないが、個々人にとって、方言をめぐり具体的に経験することは、県外、あるいは、首都圏、東京では特に、茶化されたりするなど、気分のいいものではないという実感もあるのである。やはり、現代も方言はあくまで下位に位置付けられている共通語中心の社会なのだ。

具体的な方言使用にまつわる語りを東北方言についてみてみよう。先にあげた「津軽弁」の調査を実施した佐藤（1996：31－41）は、方言に対するスティグマ（stigma）について述べている。1987年、地元紙『東奥日報』に、他県か

[8] 2016年に静岡大学の１年生（71人）に実施した。出身地域は、半数以上が静岡を含めた中部地域である。

ら青森に移り住んできた「主婦」による「津軽弁」に対する否定的な投書が掲載されたことをきっかけに、シビアな投書のやりとりがその後なされたことを紹介している[9]。1993年、1996年にも同様な事態が投書欄で展開され、方言にまつわるこのようなやりとりが、「定期的に繰り返されるテーマ」の一つになっていると指摘している。その上で、佐藤（1996：32－33）は、「90年代の人たちが意識するスティグマは、（中略）共通語が話せるようになったからこその、新たな侮蔑や劣等意識を表出する。50年代とは違った意味でのスティグマ性」が存在しているとしている。そこでは、大学生の内省もあげられ、決して、コンプレックスが払拭されたのではないことを裏付ける意見も出されている。この点に関連するものとして、イ（2009：255）がマイノリティ言語について述べているものが参考になるだろう。「きわめて狭い範囲でしか言語が用いられず、しかもその言語に強い否定的価値が付着している場合、話者は積極的にその言語を用いようとしなくなることがある。周囲の強大な言語に乗り換えるほうが、社会的上昇がたやすくなるとすれば、どうしてその誘惑を拒否できるだろうか。（中略）言語の使用領域を確保する必要があると同時に、その言語に対する話者の肯定的態度をはぐくむ必要がある」と主張している。イのマイノリティ言語の状況が東北方言にも十分あてはまるものだと考えている。

今日、共通語を話せるようになったことで、むしろ相手や場面に応じて「使い分け」、方言を隠すことができるようになったため、笑われたり、嫌な思いをする体験が実質的に減り、わざわざ全国紙に投書するまでの話題にはならなくなったが、だからといって、方言自体に対するコンプレックスがなくなったわけではない。表向きはなくなったように感じるかもしれないが、心の片隅にしっかりと存在していると考える。メディアなどでは方言が頻繁に、そして肯定的に扱われているように感じられるかもしれないが、日常生活で方言を使用しようするときに、個人として直面することとはまた別なのである。その点をきちんと分けて考える必要があるのではないだろうか。

さらに、田中（2011：227－237）は、2006年に東北方言、関西方言、九州方言のイメージについて、東京都新宿区の大学に通う大学生71人と秋田市の大学に通う大学生136人に対し、調査をしている。以下のような結果となったという（ここでは表にまとめる）。

[9] スティグマとは、「社会的に望ましくないと思われている特徴」のことを指す（佐藤1996：16）。

表2　東北方言のイメージ

	秋田の大学生	東京の大学生
田舎者のことば	89.0%	85.9%
かわいい	34.6%	57.7%
かっこいい	5.9%	2.8%

表3　関西方言のイメージ

	秋田の大学生	東京の大学生
お笑いのことば	82.4%	87.3%
かっこいい	47.1%	47.9%
かわいい	30.1%	43.7%

表4　九州方言のイメージ

	秋田の大学生	東京の大学生
かっこいい	48.5%	60.6%
田舎者のことば	41.9%	29.6%
かわいい	22.1%	35.2%

今回注目したいのが東北方言のイメージである。「田舎者のことば」というイメージではどの大学生も高い割合を示しているが、「かわいい」というイメージでは差がある。この差について、その後、秋田の大学に通う東北地方生育者の大学生たちが感じたことは、「東京という都会で暮らす若者たちが、「東北方言」を下にみた勝手な庇護意識や支配意識を反映したものだと捉え、「中央」から「地方」に対するいわば上から目線的な印象を」強くもった（田中2011：229－230）ことを紹介している。これは、先にあげた佐藤（1996）での「津軽弁」に関する否定的な投書への反響と重なるところがある。つまり、東北方言のイメージがかならずしも肯定的になったとはいえない実態に対する、東北方言話者としての若者の率直な思いだといえる。

「田舎のことば」というイメージが強く、「かっこいい」とはいえない東北方言を母語とする若い話者たちにとって、「かわいい」という、一見好意的な評価を受けても、日常的に自分たちが出会う具体的な体験について否定的なものが強くあるとすれば、当事者以外からの好意的な評価を素直に受け入れることは

しにくいだろう。東北方言は、共通語母語話者にとっては、「余裕」をもって「楽しんだり、味わったり、時には使ってみたり」できるもの（対象物）だろうが、東北方言話者にとっては、切り離せない、一体のものなのである。

今回は、はからずも、東京の大学生による「かわいい」といった、一見、肯定的な判断をめぐり、東京からの「勝手な」イメージだとする東北方言母語話者の複雑な思いがあることが明らかになった。このような思いは、数値上はなかなか出てこないものであり、当事者以外の外部の人にはなかなか言いにくいものだと思われる[10]。

結局のところ、イが提案するように、方言話者が自身の方言に対して肯定的な態度をもてるような社会的条件とは何かということを考えることの方が必要だと思う。

2.4　方言イメージ・ステレオタイプ

方言話者にとって、自身の方言のイメージやステレオタイプが肯定的なものでない場合は、特に県外や首都圏においては、見知らぬ他人に方言を聞かれたくはないだろう。ここでは、方言研究で精力的に行われてきた、方言のイメージやステレオタイプの調査研究を紹介する。

1999年以前ではあるが、貴重な調査を実施している井上（1977ab）を紹介する。そこでは、1971年に宮城、東京、京都の高校生に対してイメージ調査を実施している。東北弁、東京弁、関西弁のもつイメージをめぐり、評価語を抽出し、それらを3つのグループに分け、情的評価、知的評価、郷愁評価と称し、考察している。それぞれのグループの評価語をいくつかあげると、情的評価には、「丁寧―ぞんざい、きれい―汚い、若い女性にふさわしい―ふさわしくない」など、知的評価には、「聞きとりやすい―聞きとりにくい、能率的―非能率的、標準語に近い―遠い、昔の言葉を使わない―使う」など、そして郷愁評価には、「味がない―ある、深みがない―ある」などが含まれている。調査結果から、方言と評価、そして地域について、以下のようにまとめている。

[10] 方言ブームにあって、方言について、表立って否定的に語ることは、今やしにくくなっている。小西（2002）が鋭く指摘しているように、方言は「悪いことば」ではなく、「いいもの」「大切なもの」などと語られ、「もてはやされている」時代にあっては、型通りの質問に対しては、「タテマエ上の答えしか得られない恐れ」がある。

表5　方言と評価

	代表	情的評価	知的評価	郷愁評価
田舎型（辺境型）	東北弁	—	—	＋
近代都市型（中央型）	東京弁	＋	＋	－
古都型	関西弁	＋	－	＋

（井上1977b：87）

上の表から、東北弁は、他の方言にくらべ、知的にも情的にもマイナスに評価されている。つまり、汚い、乱暴なことばであり、若い女性にふさわしくない、聞きとりにくい、昔の言葉を使うといったイメージをもっている方言だということだ。そして、このようなマイナス評価は、東北弁話者自身も感じているということも明らかになった。

2000年代に実施された調査については、特に、田中（2011）がまとめている。方言意識調査を、2007年に首都圏の大学生（265人）を対象としたものと、2010年に16歳以上の全国の男女（有効回答数1347人）を対象としたものを実施している。前者の場合は、14のイメージ語を提示し、47都道府県のリストから選んでもらう。14のイメージ語は、「おもしろい、つまらない、かわいい、かわいくない、かっこいい、かっこわるい、男らしい、女らしい、洗練されている、素朴、あたたかい、冷たい、怖い、やさしい」である。後者の場合は、下線で示したイメージ語（８つ）に絞って実施している。それらの結果を総合的にまとめたものが以下の通りである。

「おもしろい」＝「大阪方言」
「かわいい」＝「京都方言」

「かっこいい」＝「東京方言」「大阪方言」
「あったかい」＝「沖縄方言」
「素朴」＝「東北方言（「青森」）」
「怖い」＝「大阪方言」「広島方言」
「男らしい」＝「九州方言」
「女らしい」＝「京都方言」
（田中2011：78－79）

この「方言ステレオタイプ」が「方言コスプレ」を行う際に重要な「参照枠」になると指摘している。東北方言については、「素朴」というイメージが強くあり、それ自体はプラスともマイナスとも受け取れるものではあるが、田舎性を強く帯びていることは確かである。先に紹介した田中（2011：228）での、2006年に行った秋田と東京の大学に通う大学生に対する調査では、いずれの大学生も、8割以上が東北方言を「田舎者のことば」とイメージしていることからも裏付けられる。

今まで見てきた、井上や田中の調査からも、東北方言をマイナスにみる、もしくは「田舎のことば」としてのイメージは、戦後70年以上たってもぬぐえない強力なものといえる。この方言イメージを執拗に再生産してきたものの一つが、メディアだといえる。田中（2016：114－116）は、2015年全国方言意識Web調査を行い、方言イメージに影響を与えたものをあげてもらったところ、テレビドラマ56%、テレビのバラエティー番組37.6%の順で多かったことから、「現時点におけるヴァーチャル方言とそのステレオタイプは、そのかなりの部分がテレビドラマから影響を受けたものである」としている[11]。

井上の調査で知的にも情的にもマイナス評価をもつ、特に周縁に置かれてきた東北方言は、2000年代でのメディアではどのように「利用」され、どのようなイメージやステレオタイプが作られてきたのか、以下で、具体的な番組や作品をとりあげ、考察する。結論からいえば、ここで紹介した調査で明らかになった東北方言のイメージやステレオタイプが、2000年代における今日のメディアにおいても執拗に再生産され、地域方言としてのみならず、社会方言としても、二重に周縁化され続けているということに尽きる。

[11] 井上章一氏（国際日本文化研究センター教授）は、テレビメディアが「関西＝笑い、阪神タイガースファン」というイメージを作り上げたと分析している（NHKラジオ第二、文化講演会『ゆがめられた関西像』2017年8月27日放送）

3　メディアに描かれる東北方言イメージ・ステレオタイプ

ここでは、2000年代のメディアに描かれる東北方言、東北地域、東北方言話者のイメージやステレオタイプをまとめる。私がこれまで調査してきたものを短くまとめながら紹介し、全体としてどのように表象されてきたかを考える。今回は、東北方言が利用されているテレビドラマ、娯楽番組、そして、アメリカ文学作品の日本語訳を扱う。

3．1　NHKのテレビドラマ

ここでは、全国向けの放送としてNHKが制作したドラマを考察する（熊谷（2014、2015a）も参照されたい）。対象とするものは、NHK連続テレビ小説では、まず、東北が舞台となった『どんど晴れ』(2007年放送、舞台：岩手県盛岡市と横浜市)、『あまちゃん』(2013年放送、舞台：ロケ地は岩手県久慈市（ドラマでは「北三陸」という架空の町）と東京)、そして、東京が舞台であるが、東北方言話者が登場してくる『梅ちゃん先生』(2012年放送）の３作品と、単発の地域ドラマ作品では、『続遠野物語』(2010年放送、舞台：岩手県遠野市）と『私の青おに』(2017年放送、舞台：山形県高畠町）の２作品とする。NHK連続テレビ小説や大河ドラマについて、その歴史的変遷と方言利用の分析については田中（2011）にすぐれた論考がある。

周知のように、NHK連続テレビ小説は1961年に始まったもので、日曜日を除くほぼ毎日（朝、昼、そしてBSでは夜も）15分ずつ放送されている、全国的によく知られたドラマであり、様々な分野で話題となり、研究の対象ともされてきた。これらの作品の基本的なストーリーは、いずれも女性主人公の成長物語（実話をもとにしたものもある）である。中には時代の雰囲気も反映され、それまでの慣習に縛られない新しいタイプの職業についたりする女性が登場したりするものの、当初から最新の作品に至るまで、恋愛や結婚、そして、子どもをもつなど、いわば、従来のジェンダーに沿った女性像が前提とされている。

3．1．1　あらすじ

これらの作品のあらすじを簡単に紹介する。まず、NHK連続テレビ小説についてみてみよう。『どんど晴れ』(以後、『ど』と略す）は、横浜でケーキ職人をめざす女性が主人公である。フィアンセが岩手県盛岡市にある老舗旅館の長男であり、彼が祖母の願いを受けて、旅館を継ぐことを決意したため、彼女は女

将になるべく、盛岡に移り住み、旅館で修業し、最後には女将として認められ、結婚する話である。次に、『あまちゃん』(以後、『あ』と略す)は、東京でさえない高校生活を送っていた主人公が、結婚生活に行き詰まりを感じていた母親とともに、母親の実家(「北三陸」)を初めて訪れる。祖母の職業である海女になる決意をし、修業しつつ、一方で町おこしのために、地元の同級生と一緒にアイドルとして活躍する中で、自信をとりもどす。後半は、アイドルになるために東京に行き、デビューをはたすが、結局、東日本大震災後の復興のために北三陸にもどり、同級生とともに活動していこうとする話である。

『梅ちゃん先生』(以後、『梅』と略す)は、戦後の東京が舞台である。主人公は大学の医学部で教授をしている父親を見習い、女子医専に入学し、同級生たちと切磋琢磨し、医者になり、地元で医院を開業する。また、幼馴染でねじ工場の長男と結婚し、子育てしつつ、医者として活躍する話である。この作品には、女子医専時代の同級生として秋田出身の女性と、嫁ぎ先の工場に集団就職として青森から来た男性が登場する。

次に、単発の地域ドラマのあらすじを紹介する。『続遠野物語』(以後、『続』と略す)は、女性主人公が東京の雑誌社から取材で遠野にやってくる。子供を亡くして離婚したことに思い悩んでいる彼女が、遠野でたまたま出会った老婆の家でもてなされ、死んだはずの、老婆の夫に励まされ、いつのまにか元気をとり戻す話である。『私の青おに』(以後、『私』と略す)は、東京の出版社に勤務する地元出身の女性主人公が、地元の童話作家浜田広介の『泣いた赤おに』の続編の出版作業のため、地元を訪れる。彼女は、高校時代のいじめのこともあり、また田舎だと馬鹿にして地元とは距離をおいてきた。しかし、いじめられたときに唯一かばってくれた同級生と再会し、和解し、また地元の良さも発見し、自信を取り戻す話である。

以上おおざっぱなあらすじを紹介した。これらの作品に共通する特徴をみていく。

3.1.2 女性主人公と東北方言

これらの作品に共通するのは、東北を舞台とした場合、女性主人公が地元出身者として設定されない、もしくは、地元出身者であっても方言を話さないという設定にされているということである。『あ』では、主人公が東京生まれ、東京育ちでもともとは共通語母語話者であり、「北三陸」に移り住んでから身につけた東北方言もどきを、丁寧でない共通語とともに使うようになる。しかし、

3．2で扱うように、共通語母語話者が方言を利用する場合は、自己アピールのための「いいとこ取り」であり、田中（2011）のいう「方言コスプレ」のレベルにすぎない。彼女の基本的なイメージは、あくまで「東京」出身の女性である。

NHK連続テレビ小説は北海道から沖縄に至るまで（時には国外も）様々なところが舞台となり、ドラマのロケ地に選ばれた地域は観光地として大々的にアピールする。『あ』についてみると、地元紙では観光客が増えたことを紹介している（観光客が23倍増加したと報道している。『岩手日報』(2013年9月8日付)）。

2000年から2017年前半までに制作された連続テレビ小説は34作品あり、首都圏を舞台にした4作品を除いた30作品中、東北を舞台とするものは4作品、それ以外は26作品である。そのうち、女性主人公が舞台となった地域の方言母語話者として方言を使う作品は、東北の場合、2作品（50%）あり、それ以外の場合は、22作品（84.6%）ある。関西地域を舞台とする作品に限ってみると、ほとんどが方言（母語）話者として登場している。吉村（2017：156－157）は、NHK連続ドラマ小説は、地方出身者の主人公が都会で出世するストーリーなので、ドラマのリアリティのために、「地方のことば」と「都会のことば」を対比させることが特徴的であるとしているが、舞台となった地域によって、このような差がでてくることについては説明されていない。

加えて、単発の地域ドラマ作品での女性主人公は、『続』では東京から来たという設定であり、『私』では、地元出身であるにも関わらず、基本的に地元の方言を話さない（母親との会話で一度使っているのみ）。『私』と同時期に放送された、大阪を舞台にした地域ドラマ『アオゾラカット』(2017年放送）では、主人公が男性ではあったが、登場人物は基本的に全員が関西方言を話していたことと対照的である。

さらに、『梅』では、東京が舞台になっているために、女子医専で主人公と同じ班になった4人のうち、秋田出身者一名を除いて、皆、共通語もしくは「女ことば」を話している。したがって、当然のことながら、秋田出身者は、東北方言ゆえにひけ目を感じており、ただただ感謝したり、あやまったり、笑ったりしていることが多く、口数は極端に少ない。彼女だけおさげ髪で、めがねをかけたあかぬけない外見をし、秋田の実家に帰るだけのお金もなく、また、医者になるための理由も語らず、恋愛をしたり、悩んだりすることもない。他の共通語話者は皆医者になるための理由を語り、恋愛についても悩んだり、励ましあったりする場面が多々でてくる。東北方言話者はこのようにして他者化さ

れている[12]。

これらの作品でさらに言えることは、地元出身という想定にもかかわらず、方言を使用しない女性の登場人物の存在である。

表6　地元出身者で方言を話さない女性登場人物の役柄

作品名	役　　柄
『ど』	旅館の女将、(魅力的な) 義姉 (主婦)、若い中居たち、若い写真家
『あ』	主人公の母親 (主婦)、(魅力的な) 地元の同級生
『続』	なし
『私』	主人公の (魅力的な) 同級生、若いイラストレーター

地元出身者であるにもかかわらず、方言を話さない女性の登場人物の特徴は、(魅力的な) 若い女性や主婦など、田舎イメージとはあわないタイプである。方言の序列という観点から考えてみると、関西地域、特に大阪を舞台にした作品の場合は、女性主人公を含め、ほぼ全員が関西方言を話すのが当然であることから、関西方言は、若い女性を含めた、どんな人にもふさわしい方言である一方、東北方言は田舎イメージに合わない、特に若い (魅力的な) 女性には使用制限のつく、一種の序列が存在することが、これらの作品からも裏付けられる。

一方、これらの作品において、濃いめの東北方言話者は、女性では、中高年層であり、主婦などの都会を思わせる職業ではなく、農婦、海女や中居など、どちらかというと事務的なデスクワークというより体を使う職業などについている人たちが中心で、かつ、使用された東北方言は、濁音が強調され (歌を歌うときも含め)、「東京さいぐべ」に代表される格助詞「さ」や文末表現「べ」、そして語彙は「めんこい」などごくわずかなものにとどまり、全国的によく知られた、時に間違った、ステレオタイプ的な方言が使われている[13]。しかも、大声で、騒がしく話したり、くぐもった、重い声で話したりと、極端な形で使われる。いずれにしろ、共通語話者と比べて、濁音が強調された、あか抜けない話し方をしている。

[12] このような東北方言話者の態度や物腰の描き方は、Meek (2006) でのアメリカにおける、「アメリカンインディアン」の描き方に共通している。

[13] どの作品にもことば指導者の名前がクレジットに出てくる。詳細は田中 (2011) を参照されたい。

3．1．3　東北のイメージ・ステレオタイプ

方言以外の要素として、東北を舞台とする、あるいは東北出身者が登場してくる作品には必ずといっていいほど、自然、郷土料理、南部曲がり屋やかやぶき屋根の家、囲炉裏端など古めかしい家屋、道具などが背景にひろがっている。『続』では、東京から来た主人公がケータイなど駆使して仕事しているのとは対照的に、「かまど」で「ひっつみ」料理を作ったり、「囲炉裏端」で食事をしたり、先祖代々の遺影がずらりと掲げられた広々とした「座敷」など、100年以上前の日本の農村の姿が、ドラマを通して、遠野という舞台に投射されている。

また、童話、昔話、『遠野物語』、宮澤賢治、石川啄木などにまつわるエピソードが盛り込まれる。『私』では、浜田広介の童話作品をベースにストーリーが作られ、『ど』や『続』では、お決まりの「座敷わらし」が登場してくる。また『ど』では、遠野もロケ地となり、『風の又三郎』的なシーンが再現される場面もある。さらに、『梅』では、集団就職で上京した青森出身の文学青年が、宮澤賢治や石川啄木のことを口にする。これらの作家はともに岩手出身であり、この青年の出身でもある青森出身の作家のことを語る方がより自然だと思われるが、そうでもない。

科学技術の発達した、経済優先の、忙しい都会とは一線を画した、パソコンやインターネットとは無縁の、文学、童話といったファンタジックな世界を体現するものとして、東北を描きたいようだ。『続』でも、『私』でも、自信のもてない、あるいは悩みを抱えた女性主人公が、東北で癒されて、元気を取り戻し、帰京するというストーリー設定がそのことを示している。東北を舞台にする場合は、都会の生活で疲れた人の癒しの場としての「売り」を、このような形で描いている。しかも、主人公の女性には、そのようなイメージをもった東北方言を使わせないような工夫までしている。

3．2　娯楽番組『徹子の部屋スペシャルコンサート』での「東北弁トーク」

ドラマにおいては、方言が地域と密接にかかわるものとして用いられていたが、次に取り上げる例は、地域とはかかわりのない、つまり、共通語母語話者が方言を用いる場合である。ここでは、娯楽番組について考える。

3．2．1　「東北弁トーク」

1976年に始まった長寿番組『徹子の部屋』の放送30周年を記念し、2006年から「スペシャルコンサート」が開催されている（これが編集され、翌年、テレ

ビ放送される)。ここでは、その中から、2010年（第４回)、2011年（第５回)、2012年（第６回)、2013年（第７回）にテレビ放送されたものを分析する[14]（熊谷（2011、2012）なども参照されたい)。スペシャルコンサートは、何組かのゲストを招き、それぞれが歌などのパフォーマンスをした後、黒柳徹子とトークするという流れになっている（ここでは人名への敬称は略す)。その中で、ゲストが加山雄三の場合、黒柳徹子と「東北弁」でトークする場面がある（時間は３分から６分と、回によって幅がある)。今回、これを「東北弁トーク」とする。

ちなみに、共通語母語話者である二人が東北弁を「知っている」理由が、トークで触れられている。加山については、第５回のときに、加山の父であり、往年の二枚目スター、上原謙が役柄をひろげるために、東北弁を勉強したことがあり、それを見ようみまねで息子である加山も学んだという。黒柳については、戦時中青森に疎開していたことがたびたび語られている。

興味深いことに、このコンサートは、東京のみならず、関西地域でも行うようなったという。あるとき、神戸で開催するので、トークを関西弁でもやってみようかと提案するが、黒柳が「気持ち悪いといわれるからやめる」と語っている[15]。田中（2011：253）において、関西方言母語話者の前で、一般に関西方言を使うのははばかられるといったコメントを紹介している。この点から、黒柳の発想は、彼女個人のものではなく、広く共有されたものといえる。「東北弁トーク」は2011年以後も行われていたという点からみると、関西方言と東北方言に対する態度に差があることが分かる。

３．２．２　話題と方言の関係　笑いをとるには東北方言

加山と黒柳は、トークの間、ずっと東北方言で話しているわけではない。共通語で会話している部分もある。そこで、どのような内容のものが方言で語られているのか、以下にまとめる。

---

[14] 第４回は2010年２月27日、第５回は2011年３月５日、第６回は2012年１月８日、第７回は2013年３月16日に放送されたものを調査対象とした。また、第４、５、７回はBS朝日、第６回はテレビ朝日で放送された。

[15] 2011年７月18日放送の『徹子の部屋』(テレビ朝日）で、ゲストに加山雄三を迎え、このようなやりとりをしている。

表7　話題と言葉遣いの関係

回数	共通語や「女ことば」での話題	東北方言での話題
第4回	加山が歌った*My Way*という曲にまつわる話	• ひどいじんましんで苦しんだこと • 青森のラーメン屋のおばあさんのこと • 孫のこと
第5回	• 加山の父、上原謙の東北弁学習のきっかけ • 健康法（おおまかな内容） • 趣味の絵について • 孫のこと 黒柳：客席への説明や語り掛け	• 新幹線が八戸まで開通したこと • 上原謙の年下すぎる女性との再婚 • 健康法（具体的なやり方） • 浜辺の波の描き方
第6回 東日本大震災後	• 加山の歌声への称賛、TUBEの歌について • 東北支援に行ったこと • 青森に疎開中、シラミをとってくれた話	• 東北弁でトークする理由 • 大震災後、加山の「海」の歌に対するためらいと東北の人の海への思い
第7回	• 加山のテレビ番組について • 加山が朝食を自分で作ること • なまることへのコメント • 東北弁を話す夫婦ドラマのこと • 笑うことの効用	• 黒柳の疎開中の思い出で、特に地元の人からの誘い（東北方言での直接引用） • 東北弁を話す夫婦のドラマの構想（理由と内容）

2012年に放送された第6回のトークは、東日本大震災後に行われたものであり、二人が「東北弁トーク」をしている画面には、「東北弁で日本に元気を」というテロップがついている。前年までと違い、東北方言が震災で被害が甚大な地域の方言のため、娯楽として使用しにくくなったということがあるのだろう。以下に、東北方言でトークを始めるきっかけ部分での、黒柳と加山の発言を引用する。

黒柳：わだしたちは東北が好きだから　東北の話をしてもいんだけども　まー東日本でみんながね　苦労してるどぎに　まー　ちょっと　お遊び半分できがれでも　どんなもんかなと思うんだけども　あんたもちょっと話したら

加山：え　そりゃー　いんだろか

黒柳：いーんだろう　いーんだろう

これまでは東北が好きだとか、聴衆に対して、「お遊び半分で聞かれる」などという語りはなかった。大震災後の大変なときに、娯楽とはいえ、あえて東北方言でトークすることの意義を何らかのかたちで示さなければならなかったのだろう。そのため、第6回と7回の東北弁トークは、それまでと違い、どこか控えめで、発音の一部だったり、一文を直接引用する程度の東北方言しか使っていない。

今回注目するのは、使用言語と話題の関連である。より正確にいえば、丁寧な共通語と「女ことば」か、雑な共通語とステレオタイプ的な東北方言と話題の関係である。実際使用されている東北方言は、発音では、濁音や、「き」→「ち」(口蓋化)、「し」→「す」(中舌化)とすることや、統語的には、方向を示す格助詞「さ」、文末表現の「〜べ」などごく一部の、全国的によく知られた、時に間違った「東北方言」である。むしろ多くが雑なくだけた共通語をベースに、すっとんきょうなイントネーションをつけて、大声でゆっくりと語られることばになっている。これでは、実際の東北方言をよく知らない人にとっては、雑な言葉遣いが東北方言だとイメージするにちがいない。

それ以上に気になるのが、東北方言で語られる内容である。共通語では、加山の職業でもある歌手としてのすばらしさや出演しているテレビ番組のこと、そして加山のプライベートのことでもおおまかなことを述べたりする範囲である。また、震災後は、加山が東北支援に行ったこと、東北の青年がなまっていなかったことや黒柳の疎開中の思い出など、ある程度「真面目な」話題である。特に、黒柳は客席にいる聴衆に向かって、説明したり、語りかける場合には、丁寧な「女ことば」しか話さない。一方、「東北弁」で語られる内容は、第4回、5回などで典型的に示されているように、「笑い」話が中心である。たとえば、第4回では、コンサート直前にひどいじんましんになったことが、東北方言にかえた直後に語られる。加山のこのつらさに対して、黒柳が、「どこをさわってもかいーだ(かゆい)」とあいの手をいれる。この場合、「かゆい」という意味で、「かいーだ」と表現している。「だ」を付ける言い方がステレオタイプの、勘違いされた「東北弁」である。また、ラーメン屋のおばあさんの話も下世話な話である。加山はこの話題の冒頭に、「青森のラーメン屋のばっちゃんの話もおもしれんだよね」と語る。この話を終えた後も「青森の方ってのは、おもしろいですよ。本当」と、「おもしろい」話であることを話の前後で強調している。

第5回では、加山の父、上原謙の再婚相手があまりに年が離れている(加山の娘よりも年下)ので、「とんだ迷惑だったおね」と語り、聴衆がどっと笑う場

面が映し出される。第6回以降は、多くが共通語で語られ、「笑い」話はあまりない。

第7回では、部分的な使用にのみとどまっている。しかし、東北弁を話す夫婦のドラマを二人でやろうという話になったとき、加山が「どらまつっく」(ドラマチック)なものを作って、元気になる、「ちぼうさもてる」(希望をもてる)ものにしたいと語る。以下にその箇所を引用する。

加山：その、心あたたかくなって　ちぼうさもてると　そういうようなもの
黒柳：なにがでる
加山：ちぼう
黒柳：きんぼう？　きんぼって
加山：ちぼう
黒柳：ちぼうって　言ってほしい　ちぼうってね　そこをね　ちぼうって言われると　わがらね
加山：ははははは
黒柳：きぼう　せめて　きぼうぐらいにしてもらえますかね
加山：たいして　変わんないでしょうが　今の　ほれ
黒柳：きぼうとちぼうと違うんでしょ　でもきぼうをもってやれるように
加山：あのね　今　やっぱ　健康に一番いいのはね　笑うことですね

「ちぼうさもてる」という表現については、発音では「き」→「ち」といった口蓋化が東北方言の特徴ではあるが、「さ」については、目的を示す格助詞「を」の代わりとして使用できるかどうかは定かではない。黒柳が、「ちぼう」という発音にこだわりすぎて、先に進まなくなったとき、急に、加山が健康に一番いいのは「笑うこと」だと話題を変える[16]。あたかも、東北方言でトークするのは、笑うためだというように響いてくる。つまり、(丁寧な)共通語や「女ことば」は真面目な内容を語るとき、一方、ステレオタイプ的東北方言や雑な共通語は笑いをとるとき(時に下世話な内容を語るとき)というように、「使い分け」ている。このことに関連して、アメリカにおける白人中心主義をアメリカ文学から批判的検討をしているモリスン(1994：102－103)は、「ミンストレル・ショーでは、白人の顔に黒人の化粧をほどこすだけで法から自由になれた。そ

[16] 加山のことばを受けて、黒柳は、笑うことによって脳の中で生じる効能を、いつもの早口の共通語で専門用語を交えて解説している。

れは芸人が、黒人の顔に作るか黒人を連想させるようにすれば、本来はタブーだったはずの話題を口にするのを許されたのと同じことだ」と論じている。白人中心社会において、白人が黒人を連想させるような工夫をすれば、日頃の縛りから自由になり、タブーでも語れるようになるという。このことは、共通語母語話者が、特に、大スターが、東北方言を使うことで、面白おかしい、そして、普段であれば、彼らにふさわしくない、一種のタブーともいえる下世話で下品な話題も堂々と口にできることになることと同様である。マイノリティ側のものをマジョリティ側が借用することで得をするというパターンである。

3.2.3　東北弁イメージと加山・黒柳のイメージ

「東北弁トーク」では、東北方言で「笑い」話をすることから、共通語母語話者で大スターのイメージと東北弁イメージのギャップについて語ることがある。第4回で、加山が青森のラーメン屋のおばあさんについて下世話な話をした後で、黒柳が、「若大将って紹介されてるのに　そんな話して　でも幻滅とは思わないよ　みんな　あの人は面白い人だなって思うから」とフォローしている。これは、東北方言で語ったということだけではなく、その内容についてのコメントとも受け取れるが、東北方言で下世話な話をすることは、「若大将」には合わないという思いも感じられる。

また、第5回では、一つめに、金髪で白地に色とりどりの刺繍がほどこされたロングドレスに厚底靴を履いた黒柳が、開口一番「あたすも　こんなあだまして　東北弁しゃべって　どうすんだって　思ったけんど」と語り始める。そして、加山に八戸で一緒にショーをやろうと誘われると、「あんだは　歌うたって　皆から拍手喝采もらって　あたしは　そばにいるあの外人なんだろうねって　みんなに思われて　それでかまないから　いぐべがね（行こうか）」と応えている。つまり、金髪のドレス姿をした西洋人イメージと東北方言のイメージはあわない、そればかりではなく、東北のような田舎では、そのような姿をした人は、「外人」にしかみえないだろうという含みが感じられる。

二つめに、加山の父上原謙が役柄をひろげるために東北方言を勉強しても、結局、「洋物の顔」（加山の発言）なので、役がそれほどきたわけではないという話をしている。そのとき、加山は「おれは　そんでねーから　いーんだね　きっと」と語ると、黒柳が「おめーは　ぐちゃぐちゃだから　いーんでねえの」と応える。つまり、二枚目に東北方言は似合わないということが語られている。

第7回では、加山が南こうせつから「そんな　湘南の人が　そんななまった

ら　まずいでしょ」と言われたことを紹介している。湘南の人のイメージと東北方言のイメージが合わないのだ。

以上、これらのトークから、共通語と東北方言のイメージやステレオタイプとのギャップ、序列をしっかり意識しながら、それを利用して、笑いをとっているいうことが明らかになった。共通語、二枚目、スター、西洋人、「洗練された都会」イメージをもつ人と、「田舎」イメージを色濃くもつ東北方言とのギャップである。そのギャップを観客と共有しているため、「笑い」がとれるのである。

3.2.4　いいとこ取り

「笑い」をとるために、共通語母語話者が東北方言を用いるということは、何を意味しているのだろうか。このことを考えるために参考となるのが、Hill (2008) の主張する「いいとこ取り」という考え方である。Hillは、アメリカ英語中心社会のアメリカにおいて、白人アメリカ人によるスペイン語話者に対する差別について論じている。詳細は省くが、たとえば、白人のアメリカ英語母語話者が、たとえ文法的に間違ったスペイン語を使っても、単なるアメリカ人ではなく、「好ましい人」「くだけた気さくな人」「ユーモアのある都会的な人」と評価されるという。片言のスペイン語を話しただけで好印象をもたれるという。白人アメリカ英語母語話者は、スペイン語の「いいとこ取り」(appropriation) をしていると述べている。

しかし、一方で、スペイン語母語話者に対しては、差別的なまなざしをもち、「不真面目で、怠惰で野蛮」というイメージがあるという。アメリカ英語中心社会では、スペイン語母語話者はアメリカ英語を話せないと社会的上昇も認められない。

今回の「東北弁トーク」も「田舎」というイメージを色濃く帯びる東北方言を使うことが、共通語母語話者である大スターにとって自己アピール効果をもっている。つまり、好印象を与えるために、ことばの「いいとこ取り」をしている。この点について、大学生に「東北弁トーク」を視聴してもらい、そのイメージの変化について簡単なアンケートを試みた[17]。その結果、「真面目、かっこいい、お高い、怖そう」というイメージが、視聴後は、「田舎の、普通の、面白い、人間味のある気さくなおじいさん／おばあさん」というイメージになったとい

[17] 静岡大学において、2011年に3～4年生の男性48人、女性23人の計71人に対して、2012年に1年生男性18人、女性48人の計66人に対して、第4回と第5回の「東北弁トーク」を視聴し、自由に感想を書いてもらった。

う感想が少なくなかった。これはまさしく、アメリカにおける、白人アメリカ人が片言スペイン語を使って得られる効果と同様である。

さらにいうならば、「方言コスプレ」についても、このことがあてはまる場合が少なくない。方言母語話者以外が方言を利用する機会が増え、一見すると「方言の価値が高まった」ようにみえる。方言利用が増えたという限りではその通りなのかもしれないが、そのことが即、その方言、あるいは、その方言地域や方言話者の「価値」が高まった、もしくは、ポジティブになったとはいいきれない。むしろ、そうでないからこそ、方言の利用価値があるのである。あくまで、「田舎」として周縁化されたイメージをもつ東北方言であるからこそ利用価値があるのである[18]。

3.3 『風と共に去りぬ』の日本語訳

最後に、翻訳における方言使用についてみてみる。ロング・朝日（1999：76）は、アメリカのテレビ番組や映画において、無教養の田舎者は南部訛りの英語を用い、日本語に翻訳されると東北・関東方言などになることから、「東北方言が決して良い方に写っているとは言えない」と述べている。関連して、中村（2013：49）は、「現在では、黒人の登場人物の発言を「ごぜえますだ」と訳すことは、少なくとも新しく翻訳される場合にはほとんど行われなくなった」とし、字幕翻訳家戸田奈津子も「かつては南部なまりの黒人英語に東北弁ふうの字幕をつけたが今はやらない」と語っている[19]。

今回は、アフリカ系アメリカ人が登場してくる『風と共に去りぬ』の新訳を分析する（熊谷（2015b）も参照されたい）。2015年から2016年にかけて、2冊の新訳が出版され、話題になった。鴻巣友季子訳と荒このみ訳である。鴻巣氏は翻訳家、荒氏はアメリカ文学研究者である。旧訳（大久保康雄・竹内道之助訳）では、基本的に白人アメリカ人の会話は共通語・「女ことば」、もしくは西日本方言的に訳され、アフリカ系アメリカ人のそれはステレタイプ的な東北方言もしくは北関東方言で訳されている。ここでは、アフリカ系アメリカ人のことばに注目する。女性については、主人公スカーレット・オハラの忠実な「乳母」であるマミーとうそつきで間抜けとされるプリシーを、男性については、

[18] 芸能界などで、男性が「女ことば」を駆使してキャラ立てし、自己アピールする場合にもあてはまる。「女ことば」のいいとこ取りをしている。「女ことば」が男性にも利用されるようになったからといって、女性の社会的地位がことさら高まったといえないのと同じことである。

[19] 『朝日新聞』2014年9月8日付。

主人公の男友達の家の馬丁で小生意気とされるジェームズと主人公の親戚の御者で「黒人にしてはかしこく、気がきく」ピーターを対象に、日本語訳の中で、東北方言とイメージされてきた3点にわたってチェックする。1つめは連母音の融合（/ai/→ [e:]、例、「ございます」→「ごぜえます」）、2つめは自称詞、3つめは文末における助動詞「だ」（例、「来るだ」「おいでになしまただ」）である（3めの用法については、正確にいえば、東北方言ではない[20]）。以下に、旧訳と新訳の特徴をまとめる。

表8　旧訳・新訳の黒人のことば遣いの特徴

	訳者	① 融合	② 一人称	③ 「だ」	④ 旧訳と違う特徴
マミー	旧訳	○	わたし	○	
	鴻巣	×	あたし	×	文末のばし「～だあ」「～よお」
	荒	○	おら	△	濁音、格助詞「さ」、「思っとる」
プリシー	旧訳	○	わたし	○	
	鴻巣	○	おら	○	
	荒	○	あたい	△	濁音、促音化「まっす」、「しとる」
ジェームズ	旧訳	○	おいら	○	
	鴻巣	○	おいら	△	「～っす」
	荒	○	おいら	△	濁音、促音化「怒らっす」
ピーター	旧訳	○	わし	○	
	鴻巣	△	わし	×	「じゃ」「しよる」「申す」
	荒	○	わし	△	濁音、格助詞「さ」

（熊谷（2015b：23））

表からみえてくることは、女性については、鴻巣訳がマミーについて、従来の東北方言調でなくなった以外は、あまり変化がない。加えて、自称詞が多様になっている。男性については、鴻巣訳において多少変化がみられる。全体的に気になる点として、ステレオタイプ的東北方言の特徴の一つとしての濁音化が、荒訳ではさらに頻繁になされてしまっているということである。以下に、荒訳によるマミーのことばの一部をあげる（すべて一巻からの引用である）。特

[20] むしろ、東北地方以外のところで使われているものだが、東北方言のイメージとして受け取られてしまっている。詳しくは都川（1994）を参照のこと。

に太字の部分に注目していただきたい。

「おらがお作りい**だ**しますで」(p.155)
「おでかけ前(めえ)にお盆を運べながっ**だ**」(p.179)
「生まれた**で**みてえに、そばかすだらけになっ**で**しめえますだ」(p.182)
「二〇インチまで引っ張る**ど**、いつだって気絶し**で**おしめえになる」(p.183)
「たぶん欲しいんだっ**で**わがっ**で**る程度で」(p.185)

これらは声に出して読みにくい濁音でもある。

いずれにしろ、今回の新訳からみえてくるのは、全体として、アフリカ系アメリカ人のことばとして、従来の東北方言的特徴は若干薄まったような印象ももつが、一方で、継承されているものもあり、特に荒訳では、より濃いめのもの、つまり、濁音や格助詞「さ」などが使われていて、よりいっそうステレオタイプ化された東北方言が使われていることも確認できる。このことから、ロング・朝日(1999)で指摘されたことが新訳でも継承され、東北方言のイメージが下層階級の言葉遣いとして再生産されている。ちなみに、本作品の最初の翻訳である阿部知二訳以後、アフリカ系アメリカ人のことばを東北方言的に訳すことが慣例となっているようだ。

この点に関連して、先にあげたモリスン(1994:86)は、アメリカ社会における「黒人」への周縁化のやり方を言葉遣いから論じている。「黒人の登場人物の対話は、親しみがもてないものにしようと工夫された綴りで、いかに故意にわかりにくくされ、耳慣れぬ奇妙な方言とされていることか」と嘆いている。このことを今回の新訳にあてはめて考えてみると、視覚的に「耳慣れぬ奇妙な」東北方言で翻訳することで、東北方言、東北地域、東北方言話者を周縁化している。

さらに、奇妙なこととして、日本語訳の方が、「女ことば」重視であることがかいまみえてくる。以下に具体例をあげる。マミーがスカーレットに淑女のたしなみを教えている場面である。参考として、英語の原文もあげる(日本語訳はいずれも一巻からのものである)。

"Young misses whut frowns an pushes out dey chins an' says 'Ah will' and 'Ah woan' mos' gener'ly doan ketch husbands," prophesied Mammy gloomily. "Young misses should cas' down dey eyes an' say, 'Well, suh, Ah mout' an' 'Jes' as you

say, suh.'" (p.62)

「若い令嬢が、むずかしい顔つきをして、あごをつんだして、『わたしはこうしたい』とか『こうしたくない』とか、そんなことをいうと、殿方はしらけてしまうだ」とマミーは，むずかしい顔をして言った。「若い令嬢というもんは、目をふせて、ただ、『そうですか』とか『おっしゃるとおりですわ』とかいわなくちゃいけねえだ」(大久保・竹内訳、p.124)

「『あたいこうする』『こうしねえ』なんて、顔しかめ顎しゃくり上げる娘っ子にゃ、旦那さま見つけるなんてえ、できっこねえ」。マミーが陰気な声で予言した。「娘っ子は目え伏せて、『ええ、おっしゃる通り、サー』と答えるんでごぜえますよ」(荒訳、pp.141-142)

「すぐに顔をしかめたり顎つきだしたりして "あれしたい" "これしたくない" なんて言うお嬢さんじゃあ、おおかた旦那(だんな)さんはつかまんないね」マミーは長女の将来を憂(うれ)えた。「お嬢さまちゅうのは目をふせて、"はい、そういたしましょう" "ええ、おっしゃるとおりですわ" って言うもんですよ」(鴻巣訳、p.132)

下線部分が、マミーがスカーレットに淑女としての返事のしかたを具体的に示しているところである。英語の原文は、先ほどモリスンが指摘したような「奇妙な」英語方言で一貫している。一方、日本語訳では、荒訳の前半部分以外は、「女ことば」となっている。つまり、マミー自身の言葉遣いは、大久保・竹内訳と荒訳では東北方言的、鴻巣訳ではくだけた共通語であるのに比べ、手本として示した淑女のそれは、「女ことば」になっている。日本語訳からみると、マミーは、スカーレットに代表されるような上流階級の白人女性たちのような「女ことば」を話せることになる。日本語社会においては、翻訳上、白人女性は、たとえそれが東北方言的な言葉遣いをするアフリカ系アメリカ人の口から発せられたものでも、「女ことば」を使うべきであるというのが鉄則のようだ。この点から、日本語社会においては、白人女性（特に欧米）＝「女ことば」という構図が強く望まれていることがわかる。つまり、翻訳を通して、東北方言は共通語から、そして、「女ことば」から、二重に序列がつけられている。

4　おわりに

本稿ではメディアで東北方言が使用されている例をみてきたが、ここで扱ったものはごく一部にすぎないため、一概に結論づけることはできないものの、少なくとも以下の点について指摘したい。

全体として、東北地域を舞台とするドラマについては、都会から期待される田舎観が反映され、東北が今でも童話、昔話、伝承などが息づいている自然豊かな、(失われた) 日本の原風景のありかであり、癒しの場として描かれる傾向にある。いわゆる、エドワード・サイードのいう、日本国内版オリエンタリズムである。そのイメージが、2000年代以降、むしろ強まったようにも感じる。それは、都会に向けた観光アピールの一つとして有効なのであろう。

そのようなイメージをもつ東北方言が、今回あげたNHKのドラマにみられるように、2000年代になっても女性主人公には東北方言を極力使わせないということから、井上 (1977ab) で指摘された (魅力的な) 若い女性や都会的な女性には、たとえ地元出身という設定であっても、ふさわしくない方言であるというイメージが再生産されている。

次に、共通語母語話者が東北方言を利用するという、新しい形の方言利用を分析した。田中の称する「方言コスプレ」である[21]。これは、方言が方言母語話者以外にも、つまり、誰でも利用できる言語資源 (リソース) となってきたことを意味する。田中 (2016：76) が、方言がその「土地との結びつきから解き放たれた新たな用法を獲得」していると指摘しているものである。これは、方言がより広く利用されるようなったという点では、方言の「価値」が高まったようにも思えるが、繰り返し述べてきたように、方言地域、方言母語話者、方言自体のイメージが高まったとは必ずしもいいきれない。なぜならば、誰でも利用できる言語資源としての方言イメージやステレオタイプは、あくまでマジョリティである共通語を基本にした上で、周縁に置かれたために生じるものをもとにしているからである。方言は土地から解放されて誰でも使用できるようになったが、そのもととなる「土地」のイメージがあるからこそ利用できるのである。共通語母語話者が特に東北方言を使う場合は、(関西方言とは違った意味での)「お笑い」的な要素をもたらす効果があり、自身がいかにユーモアをもった、気さくな人間であるかをアピールするためなのである。加山と黒柳の

[21] 欧米での研究では、この言語現象を言語越境 (language crossing) といっている。

「東北弁トーク」がそのことを端的に示している。

ドラマでも、『あ』では東京生まれ東京育ちの主人公が、「北三陸」にやってきて東北方言を学び、東北方言もどきを使い、「方言コスプレ」をしている。この場合も、主人公が使っているからといって、東北方言のイメージがよくなったとはいいきれない。あくまで共通語母語話者が方言を使うということであり、それが自己アピールのための道具となっているからである。結局のところ、東北方言には「田舎、農民、貧しい、昔の言葉、粗野」などといったマイナスイメージが今でもあり、特に若い（魅力的な）女性のイメージにはあわない、中年以上のワーキングクラスのことばとしてのイメージがしっかり再生産されている。

最後に、翻訳において、アフリカ系アメリカ人などを典型とする下層階級のことばのイメージとして、2015年以降に出版された新訳においても継承されている。このことは、東北方言が東北という地域方言としてのみならず、「下層」という社会方言としても周縁化されているといえる。

「方言の価値が高まった」もしくは、「ポジティブになった」という言説は、全国向けメディア、インターネット、地域おこし、若者の自己アピールなどでその利用が拡大したという限りにおいて、つまり、商品価値という点においてであり、依然として共通語中心の日本において、共通語地域以外の、方言地域、方言母語話者、方言自体の社会的位置が高まったわけではない[22]。方言が共通語と対等な共生関係になったわけではない。むしろ、その使用の拡大によって、中央と地方の序列関係に根差した、従来のステレオタイプが再生産されているという危惧も深まっている。

方言話者がどの地域においても自身の方言を堂々と使える社会的条件は何か、共通語と方言がより対等な関係を構築していくにはどうしたらいいのかといった観点から、今後も方言とメディアの関係について考えていきたい。

参考文献

イ・ヨンスク（2009）『「ことば」という幻影—近代日本の言語イデオロギー』明石書店

[22] 渡辺・唐沢（2013：25）は、共通語と大阪方言に対する言語態度に関する調査を行っている。その結果、井上（1977ab）の調査から30年以上たつものの、共通語の方が大阪方言より知的評価が高く評価され、「大阪方言に対する暖かさの評価は肯定的に変化しているが、その影響は限定的であり、潜在的には共通語がより高く評価されている」と考察している。

井上史雄（1977a）「方言イメージの多変量解析（上）」『言語生活』8月号、pp.82-91.
井上史雄（1977b）「方言イメージの多変量解析（下）」『言語生活』9月号、pp.82-88.
井上史雄（2004）「標準語使用率と鉄道距離にみるコミュニケーションの地理的要因」『社会言語科学』vol.7 no.1. pp.19-29.
金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店
金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子（2014）『ドラマと方言の新しい関係』笠間書院
熊谷滋子（2011）「『徹子の部屋』コンサートにおける東北観」『ことば』32号pp.97-108.
熊谷滋子（2012）「なぜ、共通語話者が方言を用いるのか」『ことば』33号pp.20-34.
熊谷滋子（2014）「やっぱり、東北弁は田舎の代名詞」『市民の科学』第7号pp.95-112.
熊谷滋子（2015a）「NHK連続テレビ小説『梅ちゃん先生』にみる東北観」『市民の科学』第8号pp.102-115.
熊谷滋子（2015b）「新訳がひきつぐ東北方言イメージ」『ことば』36号pp.18-33.
言語編集部（1995）『言語　別冊　変容する日本の方言』第24巻　第12号、大修館書店
小西いずみ（2002）「個人が持つ方言意識について」日本方言研究会編『21世紀の方言学』国書刊行会、p.268
小林隆（2004）「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』vol.7 no.1. pp.105-107.
佐藤和之（1996）『方言主流社会—共生としての方言と標準語—東北』おうふう
篠崎晃一（2017）『東京のきつねが大阪でたぬきにばける　誤解されやすい方言小辞典』三省堂
田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代』岩波書店
田中ゆかり（2016）『方言萌え!?—ヴァーチャル方言を読み解く』岩波ジュニア新書
田中ゆかり・前田忠彦（2012）「話者分類に基づく地域類型化の試み」『国立国語研究所論集』3　pp.117-142.
東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う』ひつじ書房

都川典子（1994）「翻訳にみる方言イメージの活用技法」『東京女子大学言語文化研究』３，pp.90-101　東京女子大学言語文化研究会
中村桃子（2013）『翻訳がつくる日本語―ヒロインは「女ことば」を話し続ける』白澤社
モリスン・トニ（1994）『白さと想像力 アメリカ文学の黒人像』大社淑子訳　朝日新聞社
安田敏朗（1999）『〈国語〉と〈方言〉のあいだ―言語構築の政治学』人文書院
吉本誠（2017）『お笑い芸人の言語学』ナカニシヤ出版
ロング・ダニエル、朝日祥之（1999）「翻訳と方言」『日本語学』18－３　pp.66-77.
渡辺匠・唐沢かおり（2013）「共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討」『心理学研究』84－１，pp.20-27
Hill, Jane(2008) *The Everyday Language of White Racism,* Wiley-Blackwell
Lippi-Green, Rosina (2012) *English with an Accent: Ideology, and Discrimination in the United States,* Routledge
Meek, Barbra(2006) And the Injun goes "How!": Representations of American Indian English in white public space, *Language in Society* 35, pp.93-128.
Weatherall, Ann (2013) Language Attitudes in Australia and New Zealand, in Howard Giles and Bernadette Watson eds. *The Social Meanings of Language, Dialect and Accent*. Peter Lang, pp.158-169.

引用文学作品

Mitchell, Margaret(1973[22]) *Gone with the Wind.* Avon Books

引用翻訳作品

荒このみ訳（2015）『風と共に去りぬ』（一）～（四）　岩波文庫
荒このみ訳（2016）『風と共に去りぬ』（五）～（六）　岩波文庫
大久保康雄・竹内道之助訳（2004[56]）『風と共に去りぬ』（１）～（５）新潮文庫
鴻巣友季子訳（2015）『風と共に去りぬ』第１巻～第５巻　新潮文庫

参考翻訳作品

阿部知二訳（1938）『風に散りぬ』　河出書房